

片足の勇者として生きよう

Mappy

ピアステーションゆう

(日本・奈良市)

みなさん、こんにちは。「ピアステーションゆう」メンバーの Mappy です。皆さんに会えることをとても楽しみにしていました。短い時間ですが、私のこれまでの経験についてお話させていただきます。

私は子供ころから何をやるにしても自信がなく、「人並み以下だ」という感覚がいつもあり、常に人の顔をうかがって生活していました。大学に入り、バイトをすると急激に人間関係が広がり、それに伴い交友関係のトラブルが積み重なり、だんだんと気分が落ち込み、20歳の時に「うつ病」と診断されました。その後、服薬とカウンセリングを続けて大学を卒業し、仕事にも就いたのですが、気分の落ち込みとの戦いは続き、何もする気力が出ずに自宅に引きこもってしまうことが何回もありました。私は「このままでは本当にダメになってしまう」という気持ちから、通院していたクリニックに併設されているデイケアに通うようになりました。3年間デイケアに通所し、次のステップを考えている時に、「ピアステーションゆう」に出会いました。2004年5月のことです。

初めてクラブハウスに来た時に印象は、「何だ、ここは?」というものでした。メンバーとスタッフが大笑いし、活気に満ちあふれていました。活動に参加し始めた時は、他のメンバーと話すこともできず、オフィスユニットでパソコンの仕事をするのが中心でした。そんな私の人生の分岐点は2006年に韓国のソウルで開催されたアジア会議に参加したことです。海外の仲間と出会い、『We Are Not Alone』を心から感じたことで、自分の中の気持ちがこれまでと違った感覚になりました。その後、積極的に講演活動にも参加し、過渡的雇用にも挑戦し、いろいろな事を前向きに考えることができるようになった私に大きな試練が降りかかりました。

2009年の冬、思いがけない事態が私を襲いました。右足の踵(かかと)の骨の中に悪性の肉腫が出来たのです。正式な病名は「軟骨肉腫」といって、骨の中にできるガン的一种です。「軟骨肉腫」は非常に稀で、原因も不明なものです。化学療法や放射線療法も成果がでない病気です。踵の骨ということもあって、治療は厳しいものになりました。「普通に歩く」それを目標とするならば“切断”しかなく、化学療法は補助的に行なうしかないと言われました。“悪性”、“切断”、“化学療法”、“長期入院”、思ってもいなかった事態が一気に私の中に押し寄せました。この時、私はクラブハウスで活動しており、次のステップとして過渡的雇用に入っており、仕事にも随分なれてきた矢先の出来事でした。悔しくて、怖くて、悲しくてたまりませんでした。夢と現実が区別できないくらい調子を崩してしまいました。

入院する前に、私はクラブハウスに1つのお願いメールをしました。それは、「お守りにしたいから、皆が映っている写真を携帯に送って欲しい」というものです。後日届いたのは、何枚もの写真のアルバム。全ての写真の裏には、皆からのメッセージが書かれていました。そして、皆からの一言メッセージが書かれた手紙。私は「ひとりじゃない、ひとりで頑張ろうなんて思わなくていいんだ」という安堵感から、涙が止まりませんでした。入院中は、抗がん剤の影響で免疫力が低下していたため、多くの方に病室へ来てもらうことができませんでした。そのため、クラブハウスのメンバーたちは私に手紙、ビデオメッセージ、携帯電話のE-Mailでアウトリーチをしてくれ、元気と勇気を私にくれました。私は大切に、大好きなクラブハウスに絶対に戻ろうと強く思いました。そして、仲間とまた笑いあおうという気持ちになり、クラブハウスから大きな勇気ももらいました。だからこそ、私は笑顔で入院生活を送ることが出来たのです。

もう1つ大きな夢を抱きました。それは、「クラブハウスに戻ったら講演活動を積極的にやろう、重複障がいをもった一人の人間として、『ひとりぼっちではない』ということが、どれだけ心の支えになるかを語る旅をしよう」というものです。

もしクラブハウスがなければ、私は今ここにいるどころか、この世にはいなかったかもしれません。日本に5ヶ所しかないクラブハウスの1つが私の住んでいる町にあり、私を救ってくれたのです。

今、私は笑顔で歩いています。義足であることになんのコンプレックスも抱いてはいません。私が貰った勇気は、それほどに大きいものでした。これからも私は勇気を持って進んでいきます。片足の勇者になろう、そんな気持ちで今を生きています。